



TITLE:

義和團運動究序説

AUTHOR(S):

堀川, 哲男

CITATION:

堀川, 哲男. 義和團運動究序説. 東洋史研究 1964, 23(3): 277-303

ISSUE DATE:

1964-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152674>

RIGHT:

義和團運動研究序説

堀 川 哲 男

はじめに

我々が義和團を研究しようとする時、その第一歩において大きな障害に遭遇する。この事件については膨大な史料が残されているが、それらは反義和團側ないしこの運動に

好感をもたぬ者による記載であり、義和團側の手になる史料は皆無だからである。この事は、いいかえれば義和團におけるイデオログの不在を示すもので、運動の本質と深く係わって居り、その事自體究明されねばならないであろう。従つて、義和團運動の研究は、いわば被告の辯明を許さぬ裁判の如きものであり、公平な評價は極めて困難といわねばならない。ここから、一方では義和團＝匪徒とする見解が現われ、他方ではこの運動に對する過當な美化がな

されるのである。更に、研究にあたつて、義和團事件・義和團の亂・義和團運動・義和拳・拳匪・北清事變等々の名稱を使用する事さえ、研究者の何らかの立場を示す事になりかねないのである。

しかしながら、十九世紀末葉に現われた義和團運動が、當時の世界をゆさぶる驚異的事件であつた事には、誰も異論がないであろう。この事件の中には極めて多様な要素が雜居して居り、それを究明する事によつて、この時期の中國の政治的状況をより多角的に理解し得るものと考え

る。以下、義和團運動研究の一部として、義和團の起源・運動發生の原因・その構成及び性格等について、考えてみようと思う。

一 義和團とは何か

我々が義和團と呼んでいるものの實體は、どのような内容のものであったか。結論をいえば、普通に使いなれている義和團という言葉のイメージに値する様な運動を包括する統一的組織ないし教團は、政府がこの運動にてこ入れする以前においては、更に名目はともかく實質的には、それ以後においても存在しなかったといえるであらう。

義和團の起源については、勞乃宣による「義和拳教門源流考」が光緒二五年九月に公刊されており、種々の史料及び諸々の義和團研究にみえる義和拳の起源についての諸説は、おおむね、根據をこれに求めている。従って、義和拳が邪教として禁止されていた白蓮教系の一派であるとする點では、一應一致した見解を示している。

「義和拳教門源流考」に收められた嘉慶一三年の給事中周廷森の奏摺によれば、江南の潁州府・亳州・徐州府、河南の歸德府、山東の曹州府・沂州府・兗州府等の地方に、無賴の棍徒があり、順刀會・虎尾鞭・義和拳・八卦教等を設立して、横暴を働いているとあり、又、嘉慶二〇年那彥

成の奏摺は、直隸の鉅鹿縣に好話教（離卦教・大乘教）、同じく直隸の灤州府には金丹八卦教等がある事、更に直隸の安平縣・交河縣・景州に離卦教が、滄州に佛門教が、青縣に義和門教・白陽教が、故城縣に義和門が、山西の祁縣に如意教がある事を指摘し、教名は異なるが、いずれも離卦教の子孫徒黨であると述べている。勞乃宣はこれを承けて、義和門教・義和門棒拳・義和門離卦教をもって、義和拳の源流であり、かつ白蓮教の支流だとし、その邪教性を證明せんとしているのである。ただ勞乃宣が「義和拳教門源流考」を公にした意圖が、義和拳の邪教性・反官性を證明する事によって、それへの彈壓を正當化する事にあつた點を考えると、^①嘉慶年間の義和門教と後の義和拳との間にどのような必然的なつながりがあつたか、いささか疑問が残る。義和團運動の發生迄、九〇年近くの時間的隔絶があり、この間、義和拳が同じ性格と目標を持ち續けたとは考えにくいからである。秘密結社・秘密宗教が長期にわたって密かに宗旨を守り續ける事も事實であるが、一方、その閉鎖的口誦傳承の性格の故にこそ、反って容易に本質を變え得る事も事實である。我々はその例を三合會の歴史にみる事

が出来る。《反清復明》を宗旨とする三合會の一部が、官憲の壓制に耐えかね、咸豐・同治年間海外に渡り致公堂なる結社を作っていたが、孫文がこれをハワイその他に訪ねた時には、會員は入會の時に《反清復明》のスローガンを宣誓するのみで、その意味を解せず、孫文が民族主義を説いても殆んど耳を貸さぬ有様であった^⑧。即ち、形式を留めつつ内容を變えて行く例である。特殊事情をぬきにして、これを一般化する事は出来ないが、逆に又、九〇年前の義和拳の性格をもつて後の義和團を實證せんとするのも適切とはいえないであろう。事實、義和團に参加した者の中にも、それが白蓮教系の祕密宗教である事を解している者は、一部少數を除いて殆んどなかった事を、勞乃宣自身述べている^⑨。

更に、祕密結社は、非合法組織として一般に反権力的性格を持つものではあるが、決して一貫した政治的目標を持った統一的團體ではない。ただ、一定の歴史的状況において、それへの壓力が加強されるか、又は社會の政治的緊張が高まった時、はじめて状況に應じた政治的目標を有すると共に、團結力と宗教としての形式を強化し、民衆をその

内部に吸収するか、または民衆の運動に附隨して、結社としての意欲的活動を開始する。従つて、義和團の問題についていえば、如何なる種類の祕密宗教が附着したかという點よりも、むしろ、どの様な歴史的状況において、どの様な對象に附着したかが問題なのである。

この事はひとまずおき、義和拳を白蓮教の一派とする主張は、その源流についての統一見解とみてよいであろう。

しかし細部においては、微妙な相違がみられる。義和拳の起源については、ほぼ次の様なものがある。

(A) 此拳自乾隆時即有之、初名八卦教、伏而未起。嘉慶十七年、林清謀逆、突入禁門者、即此匪。……近年該拳起於山東曹州府之義和村、改名義和拳、又名義和團、專與教民爲仇、教民畏之。

(拳匪紀略)

(B) 查義和教以八卦爲名、若乾字坤字之類、分爲八起、故又名八卦教。光緒戊戌年諭令各省勸辦團練、以自衛村鎮、于是山東有義和團之名。(庚子大事記)

(C) 初起自山東曹州某縣、鄉間曰義士黨、專以仇殺洋人及教民爲事。……初起名曰大刀會。自前年平白要辦積穀團練、乃以爲兵食等事實之民間、自然充足。於是辦團令下、便樹旗曰義合團、或又曰義和團。有奉旨團練之旗、有替天行道之旗、有助清滅洋之旗。(亂中日記殘稿)

(D) 義和拳源於八卦教、起於山東堂邑縣。舊名義和會。東撫捕之

急、潛入直隸河間府景州獻縣、乾字拳先發、坎字繼之。……坎字拳爲林清之餘孽、乾字拳爲離卦教部生文之餘孽、故皆尙紅。其後有黃色一派、則乾字拳所創也。坎字乾字、授法各殊。……又有震字、則山東王中之遺孽、中於乾隆間被戮。坤字拳不詳所自。(拳變餘聞)

右の諸説から知り得る事は、もっともらしくみえて、その實極めて漠然とした内容である。もともと祕密宗教の系譜なるものは傳説でしかあり得ず、従つてそこに種々の風説が附着するのは當然であらう。義和團という名前の由來についても、(A)の如き史料が信頼性は疑問だとしても存在し、また義和拳と大刀會の關係についても(C)は同一のものとみ、次にあげる(E)は兩者を並列的に敘述している。

(E)現在山東邊界、時有大刀會及義和拳匪徒與教民滋事之案。(光緒二十五年十一月一日直隸總督裕祿片 檔案)

この兩者が、共に白蓮教系でありながら本來流派を異にした事は事實だが、發祥地については奇妙な一致を示している。義和拳のはじめて發生したのが山東の曹州に隣接した地域である事は種々の史料にみえ、一應信頼して良いであらう。一方、光緒二十二年五月の劉坤一等の電報は、山東の曹州・單縣に刀匪が集まって散ぜず、その人數が極めて多い事を報じ、また軍機處が劉坤一に與えた電旨には、

山東曹單一帶、本係盜賊之藪。此次刀匪藉毀教之名、既拆教堂、復槍鹽店、出沒於山東江南兩省之間。(光緒二十二年五月二三日軍機處寄兩江總督劉坤一等電旨 檔案)

とあり、刀匪が《毀教》の名に藉りて教會を破壊し、鹽店を襲撃していると述べている。つまり大刀會の出沒した地域は、山東省西南部を中心として、それに隣接した部分の直隸・河南・江蘇に及んでおり、その活動はこの後も繼續するが、義和拳の行動がはなやかになるにつれて背後に埋没してしまうのである。また大刀會と義和拳とはその教を奉ずる事によつて銃彈を避け得るとの流言・仇教的色彩等においても類似性を示しており、兩者の關係を一概に否定する事は困難である。では、兩者は完全に同一のものかといえ、そこにも疑問の餘地がある。第一に、義和團運動に關する限り、大刀會にはボクサーの名で義和拳の名を高からしめた拳棒の習得による信奉者の吸收という點が見られない事(彼等自身は恐らく拳棒を練習したとしてもその中心は刀術の練習にある)。^⑤第二に、大刀會の行動には、義和拳に比して、より顯著な専門家的機動性が見られる事、第三に、宗教的迷信的色彩が義和拳より稀薄な事である。光緒二十五年一月の上諭には、

據稱各處會匪、名目甚多、有興中・安清道友・袍哥・天地・哥弟・三合・三點・大刀・小刀等名目、潛匿各省。(義和團VI所收)

とあり、大刀會を會匪の中に數えている。^⑥ また同じ義和拳と呼ばれるものにも、乾字拳・坎字拳・震字拳・坤字拳等の如き諸流派があり、各々宗教的儀式を異にしていた事が知られている。かかる諸流派が義和拳の擴大と共に分岐したのか、それとも本來別の流派を作っていたものか、斷定は出来ないが、恐らく後者であらう。

以上、宗教的側面に關する限り共に白蓮教系とみられる大刀會と義和拳、或いは義和拳内部の流派の差異をことさらに云々するのは、その事自體の爲ではなく、これらの間に同一起源のものとしての連帶感が存在したか否かを考えてみようと思うからであるが、これに對する答は否定的である。義和拳相互の抗争は諸處に記されており、それは同じ幹からの分裂ではなく、最初から連帶感が存在しなかつた事を示している様であり、この點は義和團の擴大の仕方と密接につながっている。

これらの點から、次の推論が可能となるであらう。それは、後になって義和團と呼ばれる様になったものの實體

が、もともと發生において同一内容のものではなかつたとする見方、つまり十九世紀九〇年代という時點において、義和拳にしても、大刀會にしても、仇教という點において共通性を示す本來多元的自衛集團の一つであつたとする見解である。その事を義和拳と大刀會の關係においてみると、事件當時における地方からの報告と後になってまとめられた回想録の類との間には明白な相異點がある。即ち、山東巡撫毓賢・直隸總督裕祿・翰林院侍講學士朱祖謀・御史黃桂鑒・慶親王奕劻等の報告では、拳會と大刀會を全て並列に記述しているのに對し、事件後一年に作られた「續義和拳源流考」及び數年後に書かれた「拳變餘聞」や「亂中日記殘稿」等では、兩者を全く同一のものとみなし、大刀會の首領朱紅燈^⑦をも義和拳の指導者として記述している。思うに、この事はいずれかの記載が誤っているといった性質のものではなく、事件の渦中に在つて發生と成長の過程を個別的に注目する者と、過ぎ去つた事件の全像を一九〇〇年という頂點において總括せんとする者との相違である。後の段階では、大部分の者にとって運動の發生と成長の過程、從つて大刀會と義和拳の區別も問題ではなく、

むしろ事件の大きさと影響に注意を集中し、運動に参加した者を、最もポピュラーな名稱——義和團・義和拳・拳匪・ボクサー——で呼ぶ事になったのである。

こうした状況は、義和團の擴大と傳播の様相にも反映し、特定の集團の連續的擴大というより、むしろ飛火的傳播であるという事が出来る。義和拳の名を聞いた村々では、教師と自稱する者を招聘して拳棒の練習を始めたという記事が多く残されている。この事は、曹州附近に起った義和拳とは別個の複数の反キリスト教的自衛集團が、義和拳の衣裝を借着したとみられ、この考え方をもってすれば、元來白蓮教の支流とされる義和團の一部が、他の集團を白蓮教徒として拿捕し地方官に引き渡すというが如き混亂を生じた事態^⑧の説明が容易になる。そして、かかる風潮が擴がるにつれて、もともと個別發生的自衛集團が、全て義和團の名で總括される事になる。この事をもって義和拳の擴大という事も出来るが、その最高潮に達した光緒二十六年の段階では、必ずしも義和拳の行動の貫徹とはいえず、むしろ義和拳的色彩を持った雑多な集團よりなる複合體と見るのが妥當である。

義和團に關する報告が初めて政府側の資料に現われるのは、光緒二十四年四月の山東巡撫張汝梅の電報^⑨であるが、それによると、直隸と山東との交界地方であらたに義民會の名目を立てて、四方に傳單を出し、直隸・河南・江蘇各省においてキリスト教と争をなしていると述べている。次いで五月一二日の張汝梅の奏摺に引かれた東昌府洪用舟・署冠縣知縣曹倜等の報告は興味ある内容のものである。即ち、信憑性はともかく、直隸・山東交界地方の民衆が拳を習い、鄉團を創立して義和と名づけている事、それらの鄉團がキリスト教會成立以前に本來は自己と家族を守り盜賊を防禦する爲に作られた事を述べており、この事は前述の農民の自衛組織へ祕密宗教的色彩が附着した例である。義和團の擴大が、農村の自衛組織を核とし宗教的色彩を加えつつ發展した事は、次の史料にも示されている。

蓋刀會・拳會與團練相表裏。犯法則爲匪、安分則爲民。近聞聯莊會逐漸推廣、江蘇・安徽・河南・直隸各省境內亦多有之。(光緒二十五年十一月二五日御史黃桂鋆摺 檔案)

或いは、戊戌變法以後に限って言えば、すでに引いた「庚子大事記」には、

光緒戊戌年諭令各省勸辦團練、以自衛村鎮、于是山東有義和團之

名。

とあり、變法運動によって促進された郷村の團練的組織の發展と關係があるかも知れない。

更に、洪用舟等の報告は、その後、

拳民所習各種技勇、互有師承、以之捍衛鄉閭、緝治盜匪、頗著成功。應請責成地方官、諭飭紳衆、化私會爲公舉、改拳勇爲民團、旣順輿情、亦易鈴束、似於民教兩有裨益。(檔案)

と述べている。これは次第に勢力を伸ばしつつある義和團への對應策を具申したもののだが、彼等が義和團という私會を地方官のてこ入れによって公會とすべきだと主張している點は、後の義和團の發展狀況に照して興味深い。光緒二四年の段階においてさえ、義和團を利用せんとする姿勢が示されているのである。

要するに、列強の中國侵入に伴ない、山東を中心とした地域には、《洋人》^⑤及びその象徴としての宣教師と中國人教徒を憎惡する氣運が生れ、これまでの農村自衛組織が新たな目的を加えて徐々に成長しつつあったが、それらの組織は統一のものではなく、時・所を異にした個別發生的なものであった。この自衛組織の擴大に媒介的役割を果したのが、古くからこの地域に温存されてきた邪教であり、

従つて、これを邪教的組織の擴大と呼ぶ事は自由だが、その實體を伝えるには何の役にも立たない。つまり、これらの組織に邪教的色彩が加味されたのは、或いは場合によつて邪教的側面が全體をおおってしまったのは、邪教の持つ摩訶不思議な儀式及び世俗的利益をもたらすと考える迷信の存在によつて、《洋人》を憎む者、更には現狀に不満を持つ分子を、廣く組織内へ吸收出來たからである。これら自衛組織の發生が個別的であつた如く、そこに加味されて宗教的色彩も一樣ではなかつた。もしそれが畫一的なもので、しかも彼等が明確に自覺していたとすれば、先に述べた義和團が白蓮教徒を捕えて地方官に邪教徒として引き渡し處刑せしめるが如き事態は發生しなかつたはずである。勿論、これを義和團内部の分裂とみる事も可能だが、諸般の事情は、むしろ分裂以前に統一的组织そのものが存在しなかつた事を示している。清朝政府は、それら個別發生的自衛組織を利用し、失敗に終つたけれども、莊親王載勛、協辦大學士剛毅等に命じて義和團を統率せしめて、統一的组织に變えようと企てたのである。従つて義和團なる言葉は、義和團運動に参加した諸集團の總稱としてのみ適用さ

るべきであつて、運動全體を一つの統一體として把握する名稱に使用するの、便宜的ではあるが、ともすれば誤解を招く言葉だと考えられる。

二 義和團運動は何故發生したか

義和團運動發生の原因については種々の要因が擧げられるが、大筋としては二つの方向から考えなければならぬであらう。一つは、運動發生の一般的背景であり、他は、特にこの時期この地域に發生した特殊要因の究明である。

運動發生の一般的要因としては、次の諸點を指摘し得るであらう。

①帝國主義の利權爭奪——日清戦争による清朝の弱體の暴露は、帝國主義の中國侵略を誘發し、下關條約に基く外國人の中國での工業權公認より、列強の勢力範圍設定、鐵道敷設權・鑛山採掘權の爭奪へと發展した。その内容が如何に苛酷なものであつたかは、例えば胡濱の「十九世紀末葉帝國主義爭奪中國權益史」に詳細に述べられている。従つて、ここでは次の事實を列擧するにとどめよう。

(a)日清戦争後一二年間(一八九五—一九〇五)に、列強が中國から

獲得した鐵道敷設權(及び優先權)・合辦權・借款權(及び優先權)等二七路線のうち、二二路線が一八九六—一九九九年の四年間に集中的に強奪されたものである事。我孫子豐氏の「支那鐵道史」は「實に支那に於ける鐵道特權の半分以上或は現國有鐵道の總延長の三分の二内外の利權は、總て光緒二十四年前後の數年間に列強が獲得せる所であつた」と述べている。

(b)外國人に對する工業權公認は、從來の中國人名義或いは合辦による工場設立から、一步進んで列強の中國への資本投下を公然と許容する事となり、ひいては帝國主義の侵入を助長した。特にそれは紡績・製粉工場の進出において顯著である。

(c)列強の鑛山採掘權の獲得が日清戦争後にはじまり、以後年々強化されている事。

(d)列強による中國への工業製品輸入が、從來の土着的手工業を破壊ないし壓迫し、勞働者の生活權をおびやかした事。

(e)山東省についていえば、曹州におけるドイツ人宣教師殺害を理由とするドイツの膠州灣租借・山東における鐵道敷設及び鑛山採掘の優先權獲得(一八九八年三月)、これに伴う山東省内の人・物資・資本等調達の優先權獲得等があり、一八九九年六月には華德膠濟鐵路公司が創立され、鐵道の建設及び經營が開始される。

②宣教師の布教上の問題

(a)宣教師は教徒の數を増やす事のみ考え、質の點には殆んど留意していない事。その爲、キリスト教に改宗する者は、大部分良民ではなく、地域社會の枠からはみ出た無賴の徒であつた。こ

の點についての報告には、惡意を含んだものがあり、全てを信ずる事は危険だが、義和團を匪徒として彈壓を主張した者も、同様の事實を述べており、一應客觀性を持つてゐる。教徒自身キリスト教の教義を理解したり信じたりしたものは少なく、改宗によつて宣教師の庇護を受ける事により、自己の利益を追求し、[△]郷里に横行する[▽]事を求めたのである。

(b)宣教師は教徒のひき起した訴訟問題に關しては、虚實を確かめず、常に教徒側に立つて中國人官吏を壓迫し、訴訟に介入した。この事は中國人教徒の量的膨張と質的低下をもたらし、中國人民の反感を強めたと考えられる。

(c)被害についての誇張的報告と過當な賠償要求。直接布教に當つた宣教師の中には、破屋數軒をもつて教會となすものもあつたが、一度被害にあつたと、事實を擴大して司教に報告し、司教は公使に報告し、公使と清朝政府との交渉に基き、不相應な賠償を強要した。

(d)宣教師の善意を認めるとしても、巨視的に政治の動きに即してみれば、一人一人が帝國主義の對中國侵略の一員としてはめこまれていた事である。その好例は宣教師二名の殺害を理由とするドイツの山東進出に見られる。宣教師が國籍を有する以上、傷害を受けると、彼の意圖とかかわりなく列強の國家的利益追求の口實とされる。しかも、その代償たるや、洋人によつて殺害された中國人の生命に比してあまりにも高價であつた。

③中國人教徒の問題——教徒の全てが無賴の徒であつたと

はいえないまでも、大部分それに近いものであつた事は事實であらう。キリスト教に改宗する理由も、法を犯し刑を免がれる爲、訴訟に勝つ爲、糧租・差徭・雜稅及び城・郷の《迎神・賽會》の費用を免がれる爲、恨を報ぜんが爲等様々であつた。^④教徒の質の劣惡さについては、義和團に同情的な李秉衡・毓賢は勿論、義和團を彈壓した袁世凱も同様の事を述べており、一應信憑性を持つてゐる。

④中國側官吏の問題——頻發する教徒と非教徒との争における地方官の態度も、義和團發生の大きな要因となつてゐる。彼等は宣教師の背後にある列強の力量を恐れ、《教民》と《平民》の争においては常に《教民》に《偏袒》したのである。この點では、逆の立場に立つ毓賢と袁世凱が共に全く同じ意見を述べてゐる。^⑤

ここにおいて、非教徒に残された道は武器と團結による自衛のみであり、義和團の急速な量的擴大はこの事情を考慮してはじめて説明出来る。また官吏にしても百パーセント教民の側に立つたのではなく、反感を抱きつつ、背後にある列強の威を恐れるが故に非教徒に苛酷な處置をとるのであるから、狀況を異にすれば容易に反教師・反教徒の側

に轉化する要素を内包していた。義和團の勢力が増大するに伴ない地方官の態度に變化が見られるのは、彼等の日見の態度にもよるが、一方では宣教師・教徒への敵意が彼等の内に載積していた事にもよるのである。

⑤河運の衰退による失業者發生の問題——道光年間以後、江南と華北を結ぶ運河は、黃河の決壊等によりしばしば壅塞し、それを利用する漕運はスムーズに進行しなかった。これに代つて登場したのが上海・天津を結ぶ海運であった。清史稿(食貨・漕運)によつてみると、道光四年に始まつた海運は一進一退を繰り返しながらも次第に擴大し、それに引きかえ、運河による漕運は、黃河の決壊・運河の淺阻等により、その役割を果せない年が現われ、それと共に漕米の折銀増加という事もあり、度々の修復にも拘らず、一時的な例外はあるが、衰退の途をたどつた。特に咸豐一年輪船招商局設立以後は、運河はますますその存在價值を減じ、例えば光緒二〇年前後には、江蘇・浙江の漕米は河運十二三萬石・海運百二十餘萬石という割合になり、更に、河運を全廢せよとの意見も出て來るのである。また、光緒二四年七月、康有爲の「請廢漕運改以漕款築鐵路摺」

(戊戌變法(二)所收)には、

其漕米則民納于縣、縣上于糧道、乃船通于運河、而後連檣繼進、循聞而上、累時費月、乃達通州、搬丁二萬人、背置倉中、然後次第運至京師。在昔歲四百萬石、近用海運、乃減至百餘萬石。

とあり、從來運河によつて運ばれた四百萬石の漕米は大部分海運に改められ、いまや百萬餘石に減じていると述べている。一方、光緒二三年に京津鐵道が完成すると、二五年以後は、海運によつて天津まで運ばれた漕米は、天津からこの鐵道によつて京師に運ばれる事となる。かかる事實から容易に想像される事は、河運に従事していた交通労働者の失業問題である。歴代の山東巡撫が時代に逆行して運河の修復による全數河運への復歸を主張するのも、河運の衰退による失業者の發生が地方の治安を亂す事を慮つたからであらう。失業者の中には、實際に匪徒の群に投ずる者も出るが、そうではなくても、潜在的豫備軍として運河一帯に析出されていたのである。また、元來これら交通労働者の集團が祕密結社の重要な地盤であつた事も考慮しなければならぬ。義和團の初期にみられた機動性は、恐らくこれら失業した交通労働者の参加を示すものであらう。

⑥兵勇の裁減による失業兵士の發生——日清戰爭の敗北は、從來の舊式軍隊が用をなさぬ事を實證し、綠營は勿論、太平天國以來國防の中樞を擔つてきた勇營の削減問題が生じる。すでに日清戰爭直後、綠營の兵額の七割裁減が決定していたが、光緒二十二年九月の盛宣懷によって上奏された「自强大計」の項目では、兵制を募兵から徵兵に改め、これに洋式の軍事訓練を興え、綠兵・練勇計八〇萬を全て撤廢する計畫が述べられている。これがそのまま實施されたわけではないが、以後、政府は新軍の育成と舊式軍隊縮少の方針にそつて各省督撫に對し、國家財政を理由に、しばしば《兵勇裁減》の緊急實施を命じている。これに對し各省は必ずしも即時同調せず、爲に政府は兵勇削減の必要性を繰り返し通達するのであるが、比較的着實に實行したのが山東の場合で、巡撫李東衡は防營・練勇を五年に分けて、五割削減計畫を實施に移した。

兵制改革は時代の要請であり、綠營・勇營は漸次洋式訓練を受けた新軍に置き代えられる事になる。ここに發生したのが兵士の失業問題であり、義和團に出て來る游勇・散勇等の一部はこれによつてゐるかも知れない。

⑦失業者發生の問題には、この他黄河の氾濫・外國工業製品流入に伴なう零細手工業の破壊等も、因をなしている。

⑧銅錢の不足による流通過程の混亂——日清戰爭直後より、銀錢の比價のアンバランスが擴大し、銅錢の騰貴・銀の下落という狀況がしきりに報告されている。一部は海外流出によるが、主要な原因は銅鑛の疲弊による産銅額の低下にあった。政府は銀圓鑄造と銅鑛開發を計畫したが早急には実績が上らず、流通過程に混亂が生じたのである。

「津西歩記」の「天津開戰本村設法保護」の項で、内患防止と窮民救済の爲の章程三條を述べているが、糧價の騰貴抑制・典當の利息酌減と典贖方法改善と共に、第一の問題は、《錢項缺乏》に如何に對處するかであつた。

一、錢項缺乏、公立官錢局、開寫零帖以便週轉、銀錢買賣、出入定價、僅餘薄利以爲局費、不得取厚利以虧民。(津西歩記)

即ち、銅錢の不足を補う爲に、官錢局發行の零帖(一種の手形)によつて決済を行なおうというのである。更に光緒東華錄(二十四年一〇月丁未)によれば、張汝梅は山東の《銀錢錢荒》の狀況が他省に比して甚しい事を報告している。

⑨一般民衆が新しく流入するヨーロッパ文明の受容に極端

に保守的で、その不可避性を理解し得なかつた事——鐵道・電信の敷設が風水を害するとして民衆の襲撃の對象となつた事はしばしば報告されているし、宣教師の善意から出た孤兒院經營さえも、幼兒の生血より藥品を精製するものとして忌避される狀況であつた。勿論、善意が惡意をもつて受けとられるには、それなりの充分な理由を擧げる事が出来る。個人の善意とは別の帝國主義の先鋒としての役割、及び中國人の感情を無視した行動がこの時期の宣教師にあつた事は事實である。だがその點をさし引いても、義和團の發生と擴大には、民衆の國際的視野の缺如と一部煽動者の非科學的宣傳が疑われる事なく通用する様な狀況が一原因となつていた事實を、否定し得ないのである。

次に一九〇〇年という時點において運動が最高潮に達する特殊要因を考えてみよう。

①自然災害——直隸・山東地方は、義和團發生の數年前から、連年自然災害に見まわれていた。光緒二十一年以後を光緒東華錄で見ると、二三年を除き、二五年迄は旱害をまじえつつも、おおむね黃河を中心とする水害であつた。

(光緒二十四年九月丙辰太后懿旨)近年以來、山東黃河屢次漫溢。瀕

河州縣受患甚深、小民蕩析離居。情形尤堪憫側。因念河工堤埝、雖經每歲修培、而潰決漫溢無歲不有。

即ち、光緒二十四年當時において、被災者の中には他郷に流亡する者も出ていたのである。しかるに光緒二十五年夏以後、水災は一轉して旱魃に移行するのであり、その點は光緒東華錄の記載にも顯著に現れている。特に義和團運動が最高潮に達する光緒二十六年については、次の様な記録が残されている。

二月間、無雨、謠言益多、不可殫述、無非痛詆洋人、仇視教民而已。
三月間、仍無雨、瘟氣流行、雜災漸起。拳匪又趁勢造言曰、掃平洋人、自然下雨消災。

四月間、仍無雨。督道府縣等、屢次設壇求禱、依然亢旱、反起暴風。

五月初間、依然亢旱無雨。(以上天津拳匪變亂紀事)

北直自入庚子以來即大旱數月、禁屠求雨、毫無靈効。(遇難日記)
今年順直一帶、雨水極少、麥苗盡槁、民氣頗爲不靖。而山西自去年冬初迄今、更涓滴無之。撫心時事、曷勝杞憂。並聞該匪起釁、亦由飢民附從所致。(拳事雜記)

自四月以來、天氣亢旱異常。京城內外喉症瘟疫等病相繼而起、居民死者枕藉。朝廷求雨多次、迄無一應。(庸擾錄)

つまり、義和團の擴大は山東・直隸を襲つた旱魃と平行に進行しており、その原因を《洋人》に轉嫁し《掃平洋人、

「自然下雨消災」との流言もしきりに喧傳された。水害・旱魃といつても規模により影響を異にするから、一般論は危険だが、水害が急激かつある意味で部分的で救済の道も講じ易いのに対し、旱魃は長期かつ廣範圍にわたる爲、及ぼす影響は一層廣く、遙かに神經をいらだたせるものである。旱魃が原因で暴動となり電柱を破壊した例は、以前よりしばしば報告されている。後でふれる沙鍋照という乞丐の集團の一部は、或いはこの様な自然災害によつて生活手段を奪われた流民でなかつたらうか。

②戊戌政變後の清朝内部主導権の問題——戊戌變法において、一時的・表面的にせよ光緒帝を擁する康有爲・梁啓超等開明知識分子のリーダーシップが形成されたが、政變後、反動勢力西太后一派の頑迷な色彩は一層濃いものとなる。

光緒帝は幽閉状態に置かれたが、その政治的失墜が決定的な形をとるのは光緒二十五年一二月の事、彼は自らの病弱を理由に端郡王載漪の子傳儁を以つて皇太子となすとの上諭を發する^③。これは西太后一派の光緒帝廢位計畫における筋書きの一步前進であつた。

元來、西太后を頂點とする反動派は外國勢力と私的利害

の故に衝突を重ねていた。一つは戊戌變法にイギリスが好意的であつた事、二つには政變後康有爲がイギリスの手引きで官憲の追求を脱し、后黨の引き渡し要求をイギリス側が拒否した事である。しかも光緒帝の廢位をめぐつて、西太后は李鴻章を通して各國を打診し同意を求めたが、回答はその意を満すものではなかつた。この事はただでさえ排外的であつた西太后一派を一層《洋人》敵視の立場に迫りやる事となつた。更に宣戰に踏み切らせた要因として、各國大使が西太后に對し政權を光緒帝に返す事を要請した點が指摘される。これがどの程度眞實でありどの程度強い要求なのか疑問だが、西太后を刺激した事は事實で、光緒二十六年五月二四日の御前會議で太后は次の様に述べている。

在各使未請歸政以前、尙有嚴懲國民之意。乃歸政一事、朝廷自有權衡、非外人所得干預也。況當今體素稱弱、垂簾聽政、本係不得已之舉。現已定奪與洋人決裂、不可再爲挽回也。(景善日記)

ここでいう排外とは國家的或いは民族的利益に基くものではなく、私的な、それも西太后個人の利益に基く排外だが、結果として義和團の擴大に有利な狀況を作り出した事は否定し得ない。義和團側と清朝反動派との同盟がなされたというのではない。反動派は義和團の排外的力量を利用

して自己の立場を有利に展開せんとしたのであり、義和團側にとっては、官憲の彈壓という壓力の一時的除去によって勢力擴大に有利な政治的狀況が生じたという單なる偶然に過ぎない。また、變法運動にかけた期待が破れ、爲に民衆が排外に傾斜したという性質のものでもない。變法派と民衆の間には越え難い斷絶があり、變法派は、人民の排外的風潮に敵視の態度をとっており、義和團の剿滅を主張するのも洋務派官僚であつた。従つて、變法派から頑固派へという清朝體制内部での政權の移行が、頑固派の意圖とは別に、人民の排外運動の發展を促進する狀況を作り出したという事である。

しかし、西太后一派の《洋人》への敵意はあくまで彼等の胸裏にくすぶる感情であつて、遅くまで表面化せず、まして對決の姿勢は示していない。強いて挙げれば、次の事柄を指摘できるであらう。即ち、光緒二五年九月の平原教案における署知縣蔣楷の教民に加擔した處置に對し、革職永不敘用にした事、同年一〇月一九日の上諭において、各省督撫、毎遇中外交涉事件、往往預存一和字於胸、遂至臨時毫無準備。此等錮習實爲辜恩負國之尤。特嚴行申斥、嗣後遇萬不得已之事、非戰不能結局者、如業經宣戰、萬無即行議和之理。各省

督撫、必須同心協力、不分畛域、督飭將士、殺敵致果、和之一字、不但不可出諸口、並且不可存記心。（光緒東華錄）

と述べている點等がそれである。だが、これらは例外的なもので、基本的には從來の外柔内剛政策の延長といひ得る。しかし、帝黨の失墜と西太后の完全な政權掌握は、官僚機構の末端に大きな心理的影響を與えたと思われる。これ迄《教民》と《平民》の争において常に教民に加擔して來た地方官の中に、平民の肩を持つ者が出て來るのは（勿論こうした變化は一般に力關係によるもので、排外を主張する民衆の力量の成長と無關係ではないが）その表われであらう。

また、后黨派と帝黨派の争は、戊戌政變において政治的には決着がついたが、思想的にはそのまま尾を引いていた。后黨派がこの争に終止符をうつべく努力する事は、とりもなおさず反動的姿勢を必要以上に前面に押し出す事であつた。とにかく后黨派の洋人に對する感情の敵意の増大、それに基く官僚機構末端における義和團彈壓という方向へ働く力の弱化、及び地方官自身の排外的感情の表面化という一連の動きが、義和團擴大を助長する微妙な政治的狀況を作り出したのである。

三 運動参加者とその指導者

義和團参加の構成を正確に知る事は極めて困難である。

史料に多く見られる匪徒・拳民・國民・平民等の言葉は、何の手掛りにもならぬし、時期及び地域によっても當然内容に異にしているとも考えられる。また、義和團各派を部分的に統率する頭目達の素性からもこの事は知り得ない。彼等の多くは地域社會からはみ出た無頼の徒であり、参加者の公約數とはなしがたい。従って、残された道は斷片的史料より推量する以外ないのである。

①農民——農民が参加者の多數を占めた事は容易に想像される。次の史料に見える流言はすぐれて農民的なもので、彼等を除去しては呼びかけの對象を失なう事になる。

時德人方將布鐵路、插旗買地。土人喧傳、凡鐵路所經若干里内、禾稼皆死。將爲聯莊會、齊向洋人拚命云。(行脚山東記)

不下雨、地發乾、全是教堂止住天。(拳匪紀聞)

拳匪又趁勢造言曰、掃平洋人、自然下雨消災。(天津拳匪變亂紀事)

義和團に参加する契機も、多くこの事を示唆している。光緒二十二年五月、陽山縣で起った大刀會による教案では、龐

三傑なる者が教民の劉蓋臣の爲に所有地内の麥を強奪された事に怨をいだき、大刀會と結んでその報復をしたものである。^⑧更に、「景善日記」には、光緒二十六年五月一日の午後、載瀾を訪問した時の様子が次の様に記されている。

於外院留佐佐領文順、帶有國民一百餘名、農民佔其多數。

また、平原教案に参加した董元柳(朱紅燈の部下)については「董元柳、莊農度日。」とあり、天津が連合軍の手に落ちた後團員の多くが歸農したという記事も、これを裏づけている。^⑨しかも、彼等は全くの貧農のみではなく、莊長・里長クラスの名もしばしば記されている。^⑩

②交通労働者——新しい交通機關の導入は舊式交通労働者の失業問題(二章参照)を惹起した。彼等が多數運動に参加した事は、義和團の主要な攻撃目標の一つが鐵道であった事からも推量し得るし、次の斷片的史料もその事を物語っている。

王洛要者、本奸民、遂初爲北河水手、虐行旅。自鐵路成、水手不得作奸、遂恨鐵路欲拆之。(拳匪紀略)

城中焚却、火光蔽天、日夜不息、車夫小工棄業從之。(庚子國變記)

天津方面の頭目で、運河一帯を根據地としていた張德成は船戸出身で、「津西旅記」に、

張德成過境、隨之數十艘、均以紅黃布裹頭、以紅布帶繫腰纏腿。刀矛林立、順流而東。

とある事からすれば、彼の集團には、河川交通労働者が多く参加していたのかも知れない。年少女子の集團紅燈照の頭目黃蓮聖母は、女船頭であつたともいう。また、人販・鹽梟等も一種の交通労働者といえるであらう。

③手工業労働者——この運動には當然手工業労働者が参加していたはずである。外國工業製品の流入によって直接打撃を受けたのは彼等であり、義和團の攻撃目標も、洋貨・洋布・洋油等輸入工業製品がその對象となつていた。しかし史料の上では、手工業労働者そのものを指すと思われるものはあまり見受けられない。その事は、外國製品の流入によって生活手段を奪われ、そして義和團に参加する様な状態にあつた者は、もはや手工業者とは呼ばれないで游民・無業の徒等と呼ばれる様な事情があつたのだろうか。

④游勇・散勇等の失業兵士——これは日清戦争後の兵制改革（二章参照）と關係があるだらう。

又值各路裁併營伍、外來散勇積匪賊江僅・宋四等、勾結無游民：

（光緒二十四年五月一二日山東巡撫張汝梅片 檔案）

查義和團會、近延京畿一帶、每有游勇・會匪混迹其間、漸至生

事。（光緒二十六年五月一五日巡視中城御史文琛等摺 檔案）其人皆外來、其中多游勇、故嫻於戰事。（平原拳匪紀事）

《游勇會匪、溷跡其間》等の語句は、諸處に見え、天津地方の頭目曹福田は游勇であつた。

⑤鹽梟・人販の類——鹽梟集團が秘密結社の地盤であつた事は佐伯富氏「清代鹽政の研究」に述べられているが、鹽梟の混入はこれと關係しているであらう。

以惠民（縣）先後正法者而論……王惟仔・王雨仔・趙長命仔、人販也、鹽梟也。（幸惠紀略）

童振青即童四老瓜供、係河南夏邑縣人、向販私鹽爲生。（光緒二十四年七月二九日山東巡撫張汝梅片 檔案）

⑥乞丐・饑民の類——義和團を構成する一集團《沙鍋照》について「拳變餘聞」には、

又有沙鍋照者、以鑿神團人挾一鍋、遇拳民戰時、析薪漸米、炊飯饗之。沙金僅如巨鉢、自言飯百人不盡。此團皆乞丐也。沿門索米濟軍、無敢拒者。

とあるが、そこに集まる者に生活の道を失つて食を求める饑民が多かつたのは事實であらう。また光緒二十六年四五月頃の涿州の状況を「崇陵傳信錄」は次の様に記している。

趙舒翹見其皆市井無賴・乞丐窮民、殊不足用。

⑦《紅燈照》で代表される婦女子の集團——紅燈照については次の様な記事がある。

庚子四五月間、忽傳有紅燈照者、皆十餘齡幼女、紅衣袴、挽雙丫髻、稍長者盤高髻、左手持紅燈、右手持紅巾及朱色摺疊扇、扇股皆朱紫。(拳變餘聞)

並有紅燈照、與義和拳匪相輔而行。紅燈照者、用俊美女子、大則十七八歲、小則十二三歲、着紅色衣履、如城隍會中之紅犯然。(天津拳匪變亂紀事)

賊匪中有名紅燈照者、皆選室女未嫁者爲之。(驢背集)

紅燈罩大頭目曰黃蓮聖母、曰二仙姑。(拳事雜記)

近日相傳有紅燈照……是義和團所收十二三四歲、未通經之閨女、效以法、便能游飛半空、以爲起火之媒。(庚子大事記)

つまり、若い女子の集團で、頭目は黃蓮聖母と名のる女子であった。これは何を意味するのか。未婚の《俊美女子》《未通經之閨女》で、しかも神秘的な法術を有し、《與義和拳匪相輔而行》という點を考えると、一種の巫女的存在だったのだろうか。或いは、義和團では法術を汚すとして女子を忌避する傾向があったが、その爲に女子が別の集團を作ったのかも知れない。「拳變餘聞」は義和團平定後の彼女達を「紅燈照皆復其居、大半爲娼焉」と記している。尚、年長女子の集團として、藍燈罩・青燈罩等の存在が傳えら

れている。

⑧會匪・土匪・馬賊の類——その内容を的確に把握する事は困難である。

⑨棍徒・土棍・無賴之徒・奸徒・奸匪・游民・無籍游民・無業之徒——これらの内容を知る事は不可能である。棍徒といい、土棍といい、游民という。だがかかる烙印は第三者の主觀の問題であり、莫とした評價ではない。ただ彼等がアウトローとして社會に析出された不満分子であった事は一應想像される。

ところで、義和團参加者に年少者が多い事實は、どのように考えるべきであろうか。年少者が義和團の煽動に影響され易かった故であろうか。或いは、當時の中國に多數の年少勞働者が存在した事と關係があるのだろうか。

他に文生・武生・經承・捕役・妖僧・道士等の名が見られ、數的には多くないが、集團の指導的役割を演じていた。

要するに、義和團の構成者は下層階級を中心とするもので、知識層はこの運動にむしろ忌避の態度をとっている。

それにひきかえ、義和團の發展と共に、宮廷内部に同調者が現われた事は事實である。また、清末の宮廷内に絶大な

影響力を持った太監の李蓮英が義和團の熱烈な信仰者であった事はよく知られている。

次に、指導者の問題だが、すでに記した様に、統一的組織がない以上、全體を統轄する指導者は存在せず、數團或いは數十團にわたって號令する者の中にはいたが大部分は一團に一頭目ありという狀況であつた。

◎朱紅燈——早くから山東方面で活躍。光緒二五年九月平原教案で政府軍に敗れ、捕縛處刑された。《在平之人》《長清之李家莊人》とあるが、はつきりした素性は不明。

自ら《明裔》と稱したとも記されている。「拳變餘聞」「平原拳匪紀事」その他の史料からみて大刀會の首領であつたと考えられる。

山東大刀會、仇視西教、毓賢獎借之、匪首朱紅燈倡亂以滅教爲名。
(拳變餘聞)

渠姓名爲朱紅燈、或曰在平人、或曰長清之李家莊人。其號謂之天龍。(平原拳匪紀事)

朱紅燈、自稱明裔。(拳案雜存)

◎李來中——總匪首・陝西人・陝西通民・董福祥義弟・乾門を稱す等とあるが、詳細は不明。回教徒の亂鎮壓で有名な董福祥(甘肅省固原人、回教徒・土匪出身?)と個人的つながり

りが想像される。

在北京者曰李來中、亦稱乾門、陝西通民、占踞涿州。(續義和拳源流考)

總匪首李來中、陝西人。(拳事雜記)

更有董福祥義弟陝人李來中者、從中指應、由是兵匪遂合爲一、到處燒殺。(庚辛紀事)

◎張德成——乾字拳の首領、直隸靜海縣の人或いは保定府容城縣白溝河の人といわれ、獨流鎮を中心として直隸省內運河一帯に影響力を有す、船戸の出で、商人の貨物運送を業とす。年四〇餘、張角を自任していたともいう。

最著則爲乾門、首曰張德成。……張乃靜海人。以拳術干靜海令、令不能制、應於制府、相見甚歡、義其行、使赴前敵所、妄言聯軍敗北、捏奏邀功者、即是人也。後爲村人所戮。(續義和拳源流考)

德成白溝河人。業操舟、往來玉河西河間。……居獨流、聲勢甚雄。
(拳變餘聞)

時有白溝河向爲船戸之張德成、裝運鋪席貨物、停泊該處、因向該鋪算取水脚……(拳亂紀聞)

且頭目是張德成、隱以張角自命矣。(拳匪聞見錄)

身着藍布衫、年約四十餘、意氣間暇、悠然自得。余聞張爲保定屬容城縣之白溝河人。(拳匪聞見錄)

獨流人張德成爲最著、所設天下第一團也。張本船家子。(天津拳禍遺聞)

◎曹福田——天津地方の頭目。靜海縣人。もともと游勇で鴉片を嗜む。《署理靜津一帶義和神團》と呼んだのは元來張德成に屬していた爲という。「天津拳匪變亂紀事」が、曹の各國に與えた戰書なるものを挙げ《靜海縣某文生所擬》としてゐる事から、文生等が一種のブレンとして參加していた事が知られる。

曹福田爲天津拳匪之魁。其自署門膀、曰署理靜津一帶義和神團。曹蓋以本任屬德成也。……天津靜海縣人。本游勇、嗜鴉片、無以自存、乘亂煽惑。(拳變餘聞)

曹福田者、靜海縣之匪首也。其先吃喝嫖賭、無所不至。其後習練邪術、以籠絡衆人。衆人惑之、遂推其爲團首。……天津・靜海・鹽山・慶雲等處拳匪、皆囑其管帶。(天津拳匪變亂紀事)

◎韓八——京城の匪首で、かつて吏部の胥吏であつた事が知られてゐるのみである。

京城匪首韓八、曾充吏部經承、喜登場演劇、卽俗所稱頑兒票者。(拳事雜記)

◎黃蓮聖母——先に述べた若い女子の集團紅燈照の頭目。

三〇歳餘。土娼とも、鴇母とも、荷足船の船頭女・船家女だともいわれる。

紅燈罩大頭目曰黃蓮聖母、曰二仙姑。(拳事雜記)

彼時天津有所謂黃蓮聖母者、一土娼也。(拳匪聞見錄)

本當のところは、荷足船の船頭女でした。(竹内好譯賽金花)
有一紅燈照名黃蓮聖母者、年三十餘歲、係一頂神看香頭之巫婆也。(天津拳匪變亂紀事)

有鴇母忽自稱黃蓮聖母。(天津一月記)

また山東地方の頭目に徐天吉・王覺一等、京師・天津地方に韓以禮・王德成・文霸等がいたとされているが、その素性は判明しない。

以上の他、小集團で指導的役割を果たしたものに次の様な連中があつた。

◎黑虎——直隸冀州の頭目。土匪。

直隸冀州有土匪名黑虎者滋事、……今團匪總頭目、聞卽是黑虎也。(拳事雜記)

◎心誠——僧侶。朱紅燈の部下。本明とも稱す。董元柳——農民の出。朱紅燈の部下。

心誠卽本明、早年出家爲僧。董元柳莊農度日。(光緒二五年一月二四日 山東巡撫毓賢摺 檔案)

◎王治邦——武生。山東禹城地方で子弟を集めて義和拳を指導。小魏莊の二教會を襲撃す。

(天主教士)高鳳儀復自禹城來見言、張澤與魏奉宣等聚隄上不逞子弟、夜練義和拳、已擾小魏莊兩教堂。小屯武生王治邦實爲之首。(平原拳匪紀事)

この他に文王・武生・僧・妖僧・和尚・道士等が、煽動者として各地に現われている。リーダーのうち経歴を追う事の出来る者ははなはだ少なく、知り得る者にしても、その記述を全面的に信じてはならない。事件を起した場合、すでに社會秩序の破壊者であり、彼等についての記載には、はじめから悪意が含まれている。しかし、義和團運動が適當な指導者を持たなかった事は事實であろう。この時期における民衆の反帝運動が大きな成果を得るには、義和團の主力であったといわゆる下層民と知識分子との同盟を必要とした。しかるに、兩者は正に相い背向する立場にあり、また提携を可能とする條件も存在しなかった。義和團運動が民衆の持てる力量を効果的に發揮し得なかった原因のつは、恐らくここにあると思われる。

四 運動の性格

先ず問題は、この運動が反封建闘争の性格を持っていたか否かである。この時期において、民衆の盛り上ったエネルギーは、どの方向のものであれ、反封建闘争へ轉化する可能性を常に内包していた。その意味では民衆の動きに「反

封建的要素が潜在した點は否定し得ない。だが義和團運動の性格を問題とする時には、こうした點とは一應區別し、まず運動そのものの性格を考えるべきであろう。

義和團に反清的性格ありとする根據としては、次の諸點が指摘される。①義和拳が白蓮教系のもので、白蓮教が元來反滿的性格を有していた事。②朱紅燈が《明裔》と自稱し、張徳成が《張角》を自任した事(三章參照)。③光緒帝・慶親王奕劻・李鴻章等を一龍二虎頭(一龍は光緒帝、二虎頭は奕劻と李鴻章)、或いは一龍二虎三百羊(三百羊は洋務派官僚)と呼んで攻撃目標にした事。④海關道・地方官衙門・監獄等の中に侵害を受けたものがあつた事。⑤富戸・巨商・舖戸・錢店等が襲撃の對象となる場合があつた事。

それにもかかわらず、積極的に義和團の反清的性格を指摘する見解には疑問がある。まず①については、祕密結社は、一般に反権力的であるとしても、常に一貫した政治的目標を持つのではなく、社會の緊張とそれに對する民衆の心的狀況の反映として、その時點での目標を作り出すものである(一章參照)。従つて、白蓮教の本來の性格云々をもつては義和拳の反清的性格は實證し得ないであろう。②の朱

紅燈が明裔を稱し、張徳成が張角を自任した事も、史料的には断片的でしかないし、非合法活動を餘儀なくされた状況で民衆に呼びかけ勢力を擴大する爲には、何ものかによつて自らの出自を權威づける必要があつた。現存せる權威を利用出来ぬ以上、明裔・張角等を持ち出すのは當然の趨勢であり、その點に過當な意味を求める事は出来ない。③については、一龍二虎頭が光緒帝・奕劻・李鴻章を指す點と、それがいいだされたのが光緒二十六年四月以降、つまり義和團各派の首領と西太后一派の連絡がついた時期である點を考慮せねばならない。光緒帝は反動派の敵視する戊戌變法の最高責任者であり、奕劻は外交を擔當する總理衙門の首班であり、李鴻章は典型的な洋務官僚で、義和團に批判的な官僚群の代表的存在である。即ち、彼等三名とも何らかの意味で西洋と關係があり、その事自體義和團の攻撃對象になり得るのである。更に「景善日記」によれば、光緒二十六年五月二十九日、載漪・載勛等は義和團員六四人を率いて宮廷に入り、皇帝との會見を要求すると共に皇帝を《二毛子》と呼んでいるし、「庚子國變記」によれば、五月二四日、反動派は大使館攻撃中止を進言した朱祖謀及び

洋務派官僚李鴻章・張之洞・劉坤一等を斬る事を主張している。この事からすれば、義和團の背後には反動派の糸が引かれていたのであり、むしろ一龍二虎頭云々は、政府内部における反動派と洋務派の對立の反映と考えられる。

④⑤は①②③と異なり、否定しきれない面が残されている。ただ、海關道・洋行・舖戶・錢店等については、「天津一月記」に、

團入海關道署、自大門以迄內宅、搶奪劈砍、無一完物、以其所司爲洋務也。

義和團之起、本因與教民爲讐、迫津城設壇後、又推及於各洋行、如薩寶實洋行、新泰興洋行、皆被搶。繼又推及於各舖戶、凡售洋貨者皆搶之。又推及於各錢店、因其曾與洋行交易也。

とある様に、これらが外國に關係あるところから、排外主義の延長と解釋する事が可能である。例えそこに附會が見られるとしても、《反洋人》の爲に、鐵道・電信等及びあらゆる洋と名のつく物を破壊する行動からすれば、これも滅洋を主張する義和團の排外主義の一環した指向性として解釋して良いであらう。地方官を殺害する場合も、政府の政策轉換と團員の數的增加という勢を借りて、かつて義和團を彈壓した者への復讐であり、支配者一般への反官的傾

向としては把えにくい。

問題は、外國人・教徒・非教徒を無差別に攻撃するに至った時點の行動を如何に解釋するかである。京師の場合を例にとり、光緒二十六年五月末日までの義和團による攻撃對象を「庚子記事」「庚子大事記」「高栢日記」「庸擾錄」によって示すと、次の様になる。

(五月一日―十五日) 鐵路洋房。電桿。電綫。馬家堡等處機房糧米貨物。

(一五日) 南西門内姚家井奉教呂姓全家。

(一七日) 西城根奉教魏姓房・男婦數人。八面槽・双旗桿等處教堂・施醫院・講經堂洋貨。

(一八日) 順治門内大衛耶蘇堂。同和當鋪奉教之房。順治門内天主堂・施醫院。東交民巷。大學堂。

(一九日) 絨綫胡同教堂。西安門内西什庫大教堂。

(二〇日) 前門外大柵老德記大藥房。琉璃廠洋油店。

(二二日) 地安門外烟袋斜街附近各鋪戶。

(二三日) 喜鵲胡同電報局。奉教男女。

(二四日) 前門内回子營教堂。中街・旂手衛・永光寺街・爛面胡同等處奉教之房。觀音寺中西大藥房。琉璃廠豐泰照像館。東交民巷。

(二五日) 西單牌樓鐘表鋪。馬市大街廣陞客店。

(二六日) 馬家堡火車站洋房・鐵路。卸貨各行棧屯積貨物。各國

使館。西什庫教堂。

(二七日) 貧富鋪戶・住戶・官宅・民居。

(二八日) 西華門内西什庫教堂・附近居民數處。

(二九日) 織家坑打醬廠等處奉教之房。教民。

一部の例外を除き、一言でいえば西洋的なものへの反抗であり、それが如何に遅れた形式のものであれ、とにかく《反洋》によって貰かれた一連の方向性を認める事が出来る。しかるに六月以降、《保清滅洋》の旗をかかげながら、その對象は、中外・教徒・非教徒を問わず、資力ある者への攻撃へと移行する。

(六月七日) 外鄉之團、則轄制官長、勒捐富戶、派丁充勇、挨戶插糧、京城之團、則尋仇焚掠、指良人爲教民、搶人勒贖、劫取行人財貨、種種私心、不可枚舉。更有亡命之徒、混入團壇、借張勢饒。所以城鄉安善良民、畏義和團如盜寇。故多勉強入團、以保全身家生命。(庚子記事)

即ち、ほぼ五月末から六月初めを境として、その行動に明白な變化が生じてくる。これを反帝より反封建への轉換とするのも一つの見方ではある。だが、この解釋は、その轉換の時期と結びつけて再検討する必要があるのではない。政府による八國連合軍への宣戰が五月二五日であり、以後政府による義和團優遇の措置がやつぎばやにとられ

る。これが義和團懷柔を目的としたうわべだけの施策で、本心は彈壓にあったとする見方はうがちすぎている。この時期に西太后一派が義和團の排外的エネルギーを利用しようとした事は、義和團のみでは足りず、消防團に出動を命じた事からも明白である。義和團優遇の措置は、一面で義和團の勢力増大を助長したが、他面、公認による安易な數的増大が質的低下をもたらした事も事實である。「庚子記事」に、

（六月二六日）有希圖分肥入團者。有與人挾仇借勢報復者。有糊口維艱、入團而求安飽者。有富豪之人、恐遭國民欺訛、自立壇場而謂保家者。因此一日比一日之多。

とある様に、義和團への参加が身の危険を伴わなくなつた時、利を求めて雑多な人間が混入し、その事がもとともと一定の枠では把え難い義和團に一層の混亂を持ち込んだのである。非合法下の活動は身の危険を伴う以上ある種の眞摯さが見られるが、合法化された時には、餘程嚴格な規律と適切な指導者がなければ、往々運動自體が腐敗するものである。加うるに、義和團には統一組織も適切な指導者も存在せず、更に義和團と非義和團との明確な境界さえも存在しない。利を求める者の詐稱による義和團の數的膨張

は、義和團と稱する者を全體として見る時、質的低下であり、ひいては一種の腐敗化である。光緒二十六年六月以後の義和團の行動には、こうした腐敗化現象が生れた點を否定し難い。以後、義和團は《洋人》に對する攻撃を大部分、甘軍・武衛軍にゆだね、自らは教徒非教徒の別なく主として資力ある者を襲撃し、物質的利益を追い求める。この事が、ある場合幾分か反封建闘争の色彩をもったとしても、支持者と批判者との中間にある多數の人心を離反させる結果となつたのであり、反封建主義への轉化というより義和團本來の目標からの逸脱とみるべきである。更に七月以後、獲物の分配をめぐり、國民相互が《械鬪》をなすに至つては、暴徒化したというのが適切であらう。むしろ全てがそうだといふのではないが、一見反封建闘争と見られるものは、多く貧富の別なく攻撃を加える暴徒の行爲であつた。彼等の行動は清朝の庇護下においてのみ存在し得る暴徒でしかなく、むしろ清朝政權を敵視すべくしてしなかつたところに一つの特質がある。よしんば、これらの暴動が、結果として封建勢力に打撃を與えたとしても、それは義和團運動が主體的に求めたものではなく、その影響或いは副

次的產物として別に論すべき問題で、運動の性格として理解し難い。この時期の義和團の破壊的行動は、自覺的なものに高められる時には反封建闘争となり得たであらうが、その行動自體を反封建闘争とは呼び得ないのである。

それでは逆に義和團が本來清朝を支持して帝國主義にあらうとする態度をとっていたかといえ、その點についても否定的である。今、保清滅洋・滅洋保清・扶清滅洋等のスローガンが義和團によって唱えられはじめた時期を見ると、ほぼ光緒二十六年四月から五月にかけての頃で、これはまさに西太后一派が義和團の排外的エネルギーを利用して自己の立場を有利に展開すべく一步を踏み出す時期である。義和團を正式に認めてはいないが、ひそかに各派の首領と連絡をとりはじめた時期でもある。従って、義和團がこうしたスローガンをかかげる事はむしろ當然で、これをもって義和團の性格を云々する事は出来ない。これ以前においては、義和團にとって、清朝は敵意の対象ではあつても支持の対象ではあり得なかった。

要するに、義和團の性格は、その發生において支配層と無關係な民衆独自の反帝國主義であると規定しなければなら

ない。彼等にとって不幸の根源を、たとえことごとくが外國勢力の侵入に基くものでなかったとしても、全てを《洋人》に求める事によって、彼等のエネルギーは高められたのであり、潜在的に所有した反清的要素——彼等自身の政府に向けるべき部分をも列強に對して暴發させたのが、この義和團運動なのである。更に、帝國主義の中國に對する重壓の高まりにも、いくつかの波が存在するが、日清戦争から義和團事件にかけての時期は、一つの高潮期であつた。列強への對決が人民の第一任務となつた時、政府への彼等の敵意は相對的に低下せざるを得ず、その内包せる全ての不満は、《反洋》という一點において、集中的に放出されたのである。

だが、その反洋たるや、極めて異常な形態をとっている事が注目される。排外運動が理性的行爲のみに終始し得ないのは當然だが、義和團の行動は、その排外感情が素朴でしかも強烈であるが故に衝動的であり、明確な目標と自己規制を持たぬ故に狂信的ですらある。この點を義和團の攻撃對象について見ると、外人宣教師・中國人教徒・教會等は勿論、一般外國人・ヨーロッパ的なものと直接間接に關

係をもつ中國人・鐵道・電信・外國製品・更に《洋》の名を冠する全ての人間・物質・事柄に及んでいる。宣教師・教徒に對する呼稱としては大毛子・二毛子・三毛子・直眼等^⑧があつたが、それは單にキリスト教關係者に對してのみでなく、いやしきも直接間接ヨーロッパ的なものと關連を持つ者は、全て二毛子・通夷として排斥されたのである。ここで義和團の攻撃對象を整理してみよう。

①キリスト教關係—教堂・施醫院・宣教師・中國人教徒・教民之房。

②一般外人とその施設—各國使館とその關係者・技師・銀行・洋行。

③新設の交通通信施設—鐵路・火車・火車站・電報局・電綫・電桿。

④洋式商品と取扱ひ施設—洋貨・洋貨舖・洋布・洋藥・殘藥舖・鐘表・鐘表舖・照像・照像舖・洋灯・洋油・洋油店・東洋車・洋房・洋樓。(一部の商品は次の様に名稱を改めた。洋貨—土貨・廣貨。洋藥—土藥。洋布—細布。東洋車—太平車)

⑤洋式の教育機關等—大學堂・同文館・武備學堂・洋學生・洋書・讀洋書之學生・藏洋書之家・洋園。

⑥外人墓地發掘—利瑪竇(Mateo Ricci)・龐迪我(Didaco de Rantolia)・湯若望(Adam Schall)・南懷仁(Ferdinandus Verbiest)

⑦海關道・府署縣署・監獄。

⑧鋪戶・富戶・典當・錢店・鹽店・沙米店・棧戶糧米貨物。

ここに見られるものは、たとえ時代に逆行した非理性的行動を伴つたとしても、強烈な反ヨーロッパ精神であり、根底において正當である。宣教師が如何に使命感にもえて中國への布教を志したとしても、民衆の心的狀況に即してみれば餘計な事であり、また歐米人が西洋文明の傳達者として現れたのだとしても、中國人の幸福と國家的利益促進の方向に働くものではなかつたはずである。少なくとも民衆にとつては、ヨーロッパ的なものの流入が不幸の根源と意識されたのであらう。

義和團の行動には顯著な後進性と、その結果としての大きな限界が存在したのは事實である。だが、知識層が民衆の内にある反帝のエネルギーに着目せず、反つて敵視の態度をとつていた狀況においては、その行動は理性の枠をこえざるを得ず、むしろその枠を破る事——沒論理性によつてはじめて反帝國主義運動として有効に機能し、侵入者に少なからざる打撃を與え得たのである。

おわりに

義和團運動はあくまで非合法活動に徹すべきであつた。

清朝政府の介入（ここでは政府による公認と一連の優遇處置を指すのだが）と義和團側の部分的譲歩は、結果として數的膨張をもたらしたが、同時に質的低下、ひいては反帝國主義運動としての力量の弱化を招いたのである。

義和團運動には、極めて多様な要素が含まれており、これを一貫した目的を持つ政治運動として把握する事、つまり單純化には常に危険が伴なう。従つて、義和團の性格は、それをめぐる全ての問題を研究し終つた後に再検討すべきであり、四章で述べた事柄は中間的結論にすぎない。ただ、いま迄述べて來た限りに言ひ得る事は、この運動の性格は、反帝國主義として特徴づけられるべきであつて、その他の要素は、あくまで附隨の性格として理解すべきだという事である。

最後に、市古宙三氏他各氏の研究から教示を受けた事を、謝意をもって附記する。

註

(1) 勞乃宣の文章は、これ以外に拳案雜存・庚子拳禁義和拳彙錄に收められているが、彼は其中で、一貫して義和拳の邪教性と反官性を證明し、即時彈壓すべき事を主張している。

(2) 革命逸史初集（馮自由）の「美洲致公堂與大同報」。

(3) 拳案雜存。

(4) 光緒二年五月二日兩江總督劉坤一電報（義和團檔案史料所收・以下檔案と略稱）。

(5) 臣查大刀會即金鐘罩邪教、由來已久、雖經地方官示禁、根株總未能絕。上年海縣不靖、民間以此教可避槍礮、傳習愈多、幾於無處不有（光緒二年六月二十四日山東巡撫李秉衡摺 檔案）時期が遅れるが、馬賊の真相（大村省三）に大刀會についての興味深い記載がある。

(6) 教匪と會匪とは嚴密には區別し得ないという見解があり、まさにその通りではあるが、兩者に相對的なニュアンスの差がある事は事實であらう。

(7) 共に檔案。

(8) 朱紅燈については、三章參照。

(9) (10) (六月)二十一日、有抄手衛衛等處義和團、由永定門城廂率獲白蓮教匪一百餘人、并起獲有紙人紙馬若干。……均解送步軍統領衙門審訊。……二十九日菜市口殺前獲白蓮教男婦七十餘人。（庚子記事）

同様の記事は綠督廬日記鈔・驢背集・庚子大事記・庚子日記等諸處に見える。

(11) 檔案。

(12) 《洋人》という言葉は單に歐米人を意味するのではなく、廣く西歐文明という意味を背後に持っている様に讀みとれる。

(13) 支那鐵道史（吾孫子豊）・清國之鐵道（帝國鐵道協會會報第

- 八卷第一號附錄）・支那經濟全書第五輯。
 (14) 支那近代工業發達史（龔駿著、中山五郎譯）
 (15) 中國近代工業史資料第二輯・支那經濟全書第十輯。
 (16) 中國近代手工業史資料二卷十三章「中國工業解體的趨勢」。
 (17) ここで述べる事は、主として檔案による。
 (18) 光緒二十四年閏三月二十八日山東巡撫張汝梅摺 檔案。
 (19) 光緒二十五年六月一〇日山東巡撫毓賢摺・光緒二十五年五月二十七日總統武衛右軍袁世凱摺（共に檔案）。
 (20) 清史稿の食貨・漕運。
 (21) 光緒東華錄（二十五年八月丙子朔）。
 (22) 光緒東華錄（二十二年九月丁巳）。
 (23) 光緒東華錄（二十三年三月癸巳の上諭）。
 (24) 例えば光緒東華錄の二十一年十一月辛卯・二十二年正月乙丑等の條參照。
 (25) 義和團運動中に現れた謠言については、いづれあらためて考えてみるつもりであるが、例えば次の様なものがあつた。
 又有二人投藥于井、適團民經過、獲其一。據云天主教堂、僱百餘人四出投藥于井、以迷人。每日每人給洋一元等語。（庚子大事記）
 (26) 京中紛紛謠傳、各教堂西人將教民家之婦女、盡行拘留、將陰戶割去、再行出賣、每人賣銀三兩等語。（庸擾錄）
 二五年八月戊子・八月己亥・九月丁未・九月己酉・九月庚戌・九月辛酉・二六年三月癸丑の各條。
 (27) 光緒東華錄（二十五年二月丁酉）。
 (28) 庚子國變記・景善日記。
 (29) 例えば、變法派のうち最もラディカルだといわれた譚嗣同でさえ、外國人殺傷・教會襲撃等の排外行動をとる民衆を「亡國之民」と呼んでいる。
 (30) 光緒二十五年一〇月壬辰上諭（義和團VI所收）。
 (31) 光緒二十二年五月二十五日兩江總督劉坤一電報・光緒二十二年六月二十四日山東巡撫李秉衡摺（共に檔案）。
 (32) 亂中日記殘稿。
 (33) 平原拳匪紀事。
 (34) 天津拳變亂紀事。
 (35) 拳亂紀聞。
 (36) 拳事雜記。
 (37) 庚子國變記。
 (38) 優遇處置としては、賞銀・食糧・武器彈藥の給付等がある。
 (39) 庚子記事・庸擾錄。
 (40) これらの言葉についての定義はかならずしも一樣ではない。一二の例を示すと、次のようなものがある。
 洋人教士教民、分大毛子・二毛子・三毛子、過之殺無赦。（庚子國變記）
 (41) 百姓年三十以上、或與洋人有關係者、謂之二毛子、年四十以上或間接與洋人有關係者、謂之三毛子。（庚辛紀事）
 (42) 匪謂教民爲直眼、謂學堂肄業生及洋行司事人爲二毛子。（拳匪聞見錄）
 ただし、政府内部の抗争の反映とみられるものは、一部除去。